

フィールドノート

カナダ、クリー族のウーマンズ・セレモニー

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻教授
谷口 智子

1、ウーマンズ・セレモニーとは？

教員研究費にて、カナダ・クリー族の「ウーマンズ・セレモニー」の現地調査のため、令和元年5月14日～5月20日まで約1週間、カナダ合衆国サスカチュワン州ホールレイク居留地で現地調査を行った。「ウーマンズ・セレモニー」は、クリー族でもともと行われていたが、一度廃れており、メディスン・マンたちが夢見や文献資料、あるいは古老への聞き取り調査によって再発見し、近年復活させた伝統儀礼である（『創られた伝統』を想起させる¹⁾）。5月の満月の前に四日間、女性たちだけでティピに籠り、歯も磨かず、入浴もせず、トイレ以外は外に出るはいけない。籠りの期間である。ティピの中で火を焚き、四日間それを絶やさず、守る。調査者は、クリー族で近年復活させられた「ウーマンズ・セレモニー」に準備段階から参加することによって、その儀礼の意味解釈を理解しようと試みた。



ティピを建てる準備（2019.5.15 調査者撮影）

1 エリック・ホプスボウム、テレンス・レンジャー編著、『創られた伝統』（文化人類学叢書）、紀伊国屋書店、1992年。

2、スピリチュアリティ

共通のキーワードは「スピリチュアリティ」である。クリー族のチーフ、ケネッチは、その妻であり、メディスン・ウーマンであるノラとともに、ウーマンズ・セレモニーの主催者であるが、彼は「我々の世界観は、religion でなく、spirituality だ」と語った。その場合の religion (宗教) とは、既成宗教のことで、そうではなく、彼らを取り巻く世界が、スピリットの世界である、という意味であろう。

スピリットとは、霊や魂のことであるが、人も植物も動物も鉱物も地球や惑星にも、生きているものにも死んでいるものにも、万物にスピリットが宿ると考えている世界観が、スピリチュアリティである²。

3、祈り

ウーマンズ・セレモニーにもサンダンスにも共通する要素が、「祈り」である。彼らにとって最も大事なものは、クリエイター（創造主）やグランドファーザー、グランドマザー、祖先たちへの「祈り」である。男性儀礼のサンダンスの場合は、「祈り」が四日間飲まず食わずのサンダンス参加や、自分の体の一部を傷つけて血を流す自己犠牲であった（サンダンスは2016年8月調査³）。

なぜ男性が儀礼で血を流すかと言えば、毎月月経のある女性と違って、男性は創造（新しい命）のために血を流さないため、という。男性が最も創造に近づくには、自分の血を流すしかない。一方、女性は毎月月経時に血を流す。月経時の女性は最もパワフルで危険な存在であるとされている。それゆえ、アンタッチャブルな存在になる。

ウーマンズ・セレモニーの場合、必ず参加者に月

経時（ムーン・タイム）の女性がいるという。今回の13名の女性参加者のうち、2名が月経時だった。今回のウーマンズ・セレモニーは満月に向かって三泊四日でティピに籠る祈りの儀式であった（2019年5月17日から5月20日まで）。

4、夢、ビジョン、タバコの煙

ウーマンズ・セレモニーで最も重要視されるのが「夢」や「ビジョン」だ。スピリットたちとの対話や、夢や啓示を通して、メッセージをもらうことが重要なのだ。

祈りの内容は個人的なものから人類全体のものまでさまざまである。女性たちは少なくとも朝昼晩と一日に三度は祈る。祈るときは中央の石を組んだ竈に集まり、自分自身をセージでスマッジ（燻）し、そのあとタバコもセージの煙でスマッジして、創造主や祖先たちに祈った後、中央の焚火の中に落とす。天上界への媒介となる煙を通して、祈りが天上界に届けられる（ここでは M. エリアーデの「中心のシンボリズム」が想起される⁴）。

この煙はタバコのセレモニーであるパイプ・セレモニーにも通じる（パイプ・セレモニーは車座になってパイプをふかしながら次々と回していくセレモニーで、これもスピリットたちに煙とともに祈りをささげるものである）。

5、ウーマンズ・ティピで行われる夢見、祈り、トーキング・サークル

目に見える三角形のウーマンズ・ティピの次元と、目に見えない逆三角形の構造を持つスピリットたちのティピの次元が交差し、生きている女性たちとスピリットたちとの間に対話が生まれる。

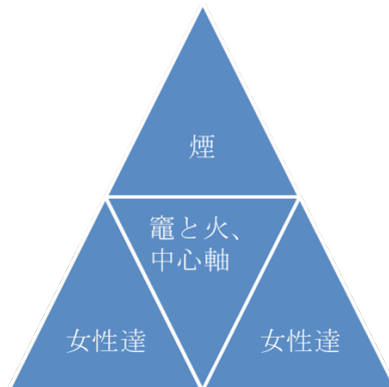
2 一般的には「アニミズム」という学術用語が使われてきたが、ポスト植民地主義的批判から問題があるのでここでは使わない。「スピリチュアリティ」という用語の使用は、クリー族のチーフ、ケネッチに従う。

3 谷口智子、「カナダ先住民クリー族のサンダンス儀礼—ホールレイク居留地の事例—」、『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』49号、愛知県立大学外国語学部、135-158頁、2016年。

4 「中心のシンボリズム」とは、宗教学者の M. エリアーデが提示した概念。聖なるものの顕現 hierophany が起こる場としての「〈中心〉のシンボリズム the symbolism of the "Center"」について、エリアーデは次のように説明している。「ヒエロファニーによる地平から地平への突破がもたらされる場所では、上方（神界）あるいは下方（地下界、死者の世界）へ向かう入口が作られている。三つの宇宙平面——地、天、地下界——は互いに交流する。この交流はしばしば、天地を支え、結びつけ、かつ下の世界（地獄の領域）に基礎を置く、宇宙の柱（axis mundi）、世界軸という形象によって表現される。この宇宙の柱はただ世界の中心にのみ存在しうが、居住可能な世界はすべてその周囲に広がるからである。こうして我々は一連の宗教的観念、宇宙論的形象を扱うことになる。それらは分かちがたく結びついて、伝統社会の「世界システム」と呼ぶことができる一つのシステムを形づくる。すなわち、(a) 聖なる場所は空間の均質性における裂け目を構成する。(b) この裂け目は（天から地へ、およびその逆、あるいは地から下界へというように）一つの宇宙領域から別の宇宙領域への移行を可能にする入口によって象徴される。(c) 天との交流は、柱（宇宙の柱）、梯子（ヤコブの椅子）、山、樹、蔓（つる）などいくつかの形象のどれかによって表現されるが、みな世界軸に関係する。(d) この世界軸の周囲に世界（＝我らの世界）が広がる。したがってこの軸は「中央に」、すなわち「地の臍（へそ）」にある。それは〈世界の中心〉である。」Mircea Eliade, *The Sacred and the Profane: The Nature of Religion*, trans. Willard R. Trask (New York: Harcourt, 1959), pp. 36-37. ミルチャ・エリアーデ著、風間敏夫訳、『聖と俗——宗教的なるものの本質について』（叢書ユニベルシタス）、法政大学出版局、1969年、29-30ページを参照（ただ日本語版の翻訳が固いので、英語版から調査者が翻訳した）。



(図1) 逆三角形の不可視のティピ=スピリットの世界



(図2) 目に見えるティピ

(煙を媒介にしてあの世につながるこの世の世界)

籠る三泊四日では、祈りを通して対話をする時間である。ティピの真ん中に火を焚いて、その火を三泊四日で守る。朝昼晩と少なくとも日に三度は女性たちが時計回りに順番でタバコの火をとって燃やして祈りをささげる。個人的な祈りがあるときは日に三度以上でもいい。

その対話の間、夢やビジョンなどを通して返答が帰ってくる場合もあり、それゆえに籠っている女性たちは(冬眠中の熊のように)長い時間寝ている人もいた。祈りや問いに対する答えは、トーキング・サークルの中でのシェアで、女性達からももらえるヒントなどにも見つけることができる。それから具体的な事象として現れる場合もある(今回の場合は、四つの火事や熊の到来)。

外では男性たちが対の火を焚いて、その場を守り、女性たちのために食事の支度を日に三度行っていた。

6、月が満ちて、四日目の昼、ティピの外に出る
ウーマンズ・セレモニーは、日常とは逆転した発想で行われる。クリー族はもともと母系社会である

が、近代化の影響で、男性優位の白人社会の影響も受けている。しかし、少なくともウーマンズ・セレモニーの間は、女性が主人公になる。女性が「聖なる人」になり、大地の子宮に見立てられた、ティピという「非日常空間」に籠る。女性が外出するのはトイレの時だけで、スカーフをかぶり、男性に顔を見せずにトイレに行く。トイレから帰ってくると、男性にスマッジして清めてもらい、ティピの中に入り、四日間過ごす。

四日目の昼、女性たちは最後にティピを出て、東西南北を向いて歩いていき、男性たちが奏でる歌や音楽に合わせて、東西南北のスピリットに向かって踊った(サンダンスで男性が躍る別のバージョンとして女性たちが踊るのだと調査者は理解している)。

7、まとめ

ウーマンズ・セレモニーは、男性儀礼であるサンダンスと対の女性儀礼として捉えられる。女性は隔離され、「祈り人(聖なる人)」になり、四日間籠る。ウーマンズ・ティピはスピリットの見えない逆三角形のティピと対になっている構造だ。祈りとタバコの煙を通してスピリットの世界とつながる非日常空間・時間で四日間過ごす。天と地をつなぐ媒介は、タバコの煙である。

夢やビジョン、トーキング・サークルの会話や、現実の事象が祈りや願いに対するスピリット側の返答になる。女性たちはそれをキャッチしてメッセージを読み解く。ウーマンズ・ティピの中でトーキング・サークルを通して自分の悩みや願いをスピリットや他人にシェアした女性たちには、一緒に儀礼の過程を過ごした仲間として、「コミュニタス」⁵の感情が生まれる。大地の子宮に見立てられたティピから出てくるときは、全員が同じ母の胎内にいた卵子たち、あるいは新生児として「生まれ変わる」経験を。ティピは「大地の母の胎内」であり、ウーマンズ・セレモニーは、象徴的に生まれ変わる「死と再生」の儀礼である。

5 「コミュニタス」とは、人類学者のヴィクター・ターナーの概念で、巡礼や通過儀礼中に生まれる「何者でもない」状態の、移行中の集団のこと。構造化されていない、反構造の状態の集団。したがって「何者でもない」状態から、何か新しい世界を作る可能性のある集団である。ヴィクター・ターナー著、富倉光男訳、『儀礼の過程』、思索社、1985年。